

洋画04年NO50

「スパン(SPUN)」



2004(平成16)年5月12日鑑賞<ヘラルド試写室

>

監督:ジョナス・アカーランド

ロス/ジェイソン・シュワルツマン

ニッキー/ブリタニー・マーフィー

コック/ミッキー・ローク

スパイダー・マイク/ジョン・レグイザモ

クッキー/ミーナ・スヴァーリ

frisビー/パトリック・フュジット

東芝エンタテインメント配給・2002年・アメリカ・スウェーデン映画・102分

<ドラッグにおぼれる若者たち>

この映画のうたい文句は「次世代を担う若手スターから実力派の個性俳優まで揃った豪華キャストと、才能あふれる各国のクルーたち」とされているが、ロス(ジェイソン・シュワルツマン)とニッキー(ブリタニー・マーフィー)を中心とする主人公の若者たちは、みんなドラッグの「愛好家」。中毒にはなっておらず、いつでもやめられると本人たちは言っているが、果たしてどうか・・・？ドラッグを吸うと急に瞳孔が開き、身体がシャキッとなり、頭の中にはさまざまなアニメの世界(?)が広がり、自分がスーパーマンになる(?)らしいが・・・？

そんなドラッグの助けを借りて、3日間不眠不休で遊ぶ(?)主人公たち。やらなければならない仕事をもっているわけでもなく、どうせヒマなんだから、そんなにドラッグを吸ってまで頑張らなくてもいいのに、と思うのだが・・・？

＜9・11テロそしてイラク戦争＞

2001年に発生したニューヨークでの9・11同時多発テロはアメリカに未曾有のショックを与えた。そして、この9・11テロ以降、アメリカでは、自分の人生を襲う不安因子を排除して日々の時間を過ごすため、ドラッグ頼りのアウトロー的若者が増えたとか・・・？

2004年5月12日の今、アメリカ軍によるイラク人捕虜虐待問題が報道され、イラク国内はもとより、全世界から非難をあびている。このような、自国のマイナス情報が公開されること自体が、ある意味では、アメリカ民主主義の健全さ、プラス面を示すものと言えるものの、テレビ画面に放映される虐待を受けるイラク人捕虜の姿は痛々しい限り。

そして、このような行為を行うアメリカ兵は、きっとドラッグをやっているのでは、という指摘があちこちからされている。イラクに民主主義を広めるため、という大義名分のもとに、アメリカが行なった「正義の戦い」にも、ドラッグのカゲが忍び寄っていることはまちがいない。かつて1960年代にアメリカが苦い経験をしたベトナム戦争の時も、きっと同じように、兵士たちの間でドラッグが蔓延していたことだろう。

＜覚醒剤撲滅キャンペーンの視点でみると・・・？＞

日本では数年前から政府広報が率先して「覚醒剤追放」キャンペーンを展開している。映画館でも本編上映前によく放映されているおなじみのもの。私も、弁護士としての仕事上、覚醒剤に関する事件を扱ったことは何回もあり、そのコワさは身にしみて(?)いる。そういう目からこの映画を観ると・・・？

この映画に登場する若者たちは、結果的にドラッグから立ち直った「勝ち組」と、立ち直れずに犯罪者となった「負け組」の2種類に分かれた。ロスとニッキーは「勝ち組」に入ったが、スパイダー(ジョン・レグイザモ)、クッキー(ミーナ・スヴァーリ)、フリスビー(パトリック・フュジット)の3人は「負け組」。この「負け組」に入った若者たちは、もはやどうしようもないはず。世間はそんなに甘いものではない！

＜こんな乱れた生活でいいのか！＞

ボロボロの「ボルボ」に乗った主人公のロスは、大学を中退してブラブラしている人のいい奴。だから、運転手をやってくれと頼まれたらそれをオーケーし、成り行きまかせの生活となっている。少しはまともそうなこのロスも、モーテルで一夜を過ごしたストリッパーをベッドに縛りつけたまま外に出るなど、ちょっと変態(?)気味・・・？また、スパイダーはドラッグの売人だし、フリスビーはテレビゲームおたく。そして、1人年配者のコック(ミッキー・ロック)は超高純度麻薬の製造人。要するにロクな奴はいない。女性陣も、主人公のニッキーはストリッパーだし、スパイダーの恋人のクッキーは何の仕事もしていない様子。

こんな連中が、汚い家やモーテルの中でヤク漬け、セックス漬けのだらしない乱れた生活を送っている。恋人同士(?)のケンカのネタも、出張の売春婦を頼んだとか、テレホンセックスをしたとか、何ともバカバカしいもの。そしてまた、そのののしり合いも、「FUCK YOU」という汚い言葉の応酬で、その表現力の貧しさやボキャブラリーの貧しさには、目をおおうばかり・・・。「お前ら一体何をしているんだ！」と思わず怒鳴りたくなってしまうが・・・？

＜この映画は一体何が言いたいのか・・・？＞

ドラッグのおかげで3日間、「不眠不休のお遊び」をした若者たちのうち、フリスビー、スパイダー、クッキーの3人は逮捕されておジャンとなったが、ニッキーは子供と再会して、人生を再出発するべく、ラスベガスに戻ることに。そしてロスも、恋人のエイミーに振られながらも、再出発できそう・・・？

こんな2人の若者に、未来を託していいのかどうかかわからないが、この映画ではそれくらいしか明るい展望は見えてこない。「個性的」「刺激的」という言葉は私も大好きだし、流れる音楽は耳に残るいいものだが、こんな「個性」や「刺激」を求めるのはやめてほしいと私は思わざるをえない……。さて、皆さんはどうだろうか・・・？

＜昔の「若者映画」と比較しても・・・？＞

明日への希望を失い、荒みきった若者の行動や心理をどう描くのかは、いつの時代

でも映画の1つのテーマ。かつてのジェームズ・ディーン主演の『エデンの東』(54年)や、ニューシネマの代表作となった『俺たちに明日はない』(67年)などは、その時代、時代の若者像をみずみずしく描いたもの。そしてそれらの作品は、若者の暴走や悲劇的結末の中にも、たくさんの真剣な問題提起があったように私は思う。

しかしこの作品の中にどれだけの真剣な問題提起があるのか、どうも私にはサッパリ・・・？ やっぱり昔の若者映画の方がよかった、と思うのは、単に俺が年を取っただけのことなのだろうか・・・？ そんなことはないと思うのだが・・・？

2004(平成16)年5月12日記